

浸透度を得た、アメ横の裏側

・裏と表の境界に新しい建築は現象する・

裏は一般に目の目を見ない概念だ。建築においても、陰に隠れ、排管にまみれながら、それでも寡黙であり続ける。

しかし、通りにおいて表と向かい合わされた裏は適応という名目で変化を求められる。

それでも、その際に裏が裏のままでありながら、表を内包していれば、裏は新たな建築となり、新たな建築は新たな通りを生むだろう。



01.Problem



上野駅一御徒町駅間を結んでいる山ノ手線・京浜東北線と宇都宮線の通る二本の高架に挟まれた通りが、アメ横を含む上野の商店街エリアには存在する。

そして、この通りには建築の表と裏が同時に存在し現在では表通りとして使われている。しかし、表通りとして存在するこの通りには、建築の裏が裏のまま存在することで表通りの良さが半減してしまっている。

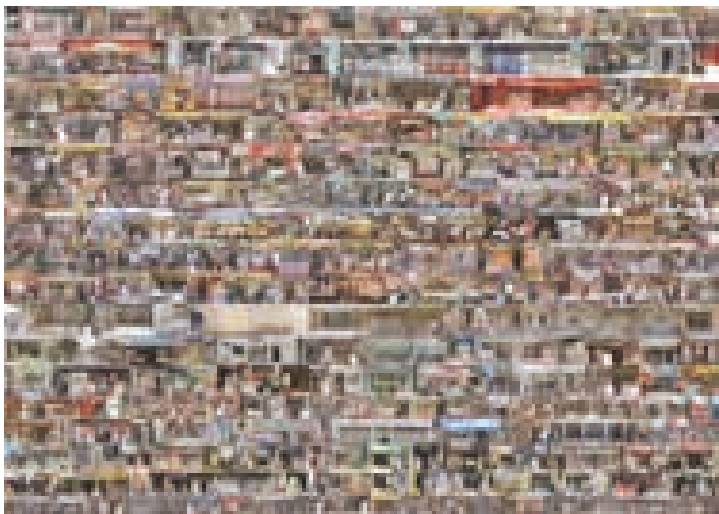
建築の表と表が共存する通りは、このアメ横を中心とした商店街エリアには多数存在している。だが、この通りにしかない建築の裏を考慮することで、新しい顔をもった通りが生まれてくるのではないかと考える。

02.Concept



そこで、僕らはこの通りが属する上野一御徒町駅間に存在する約400店にも及ぶ店舗から裏と表の要素を見だし、裏にはない表の要素を抽出する。それらを考慮することで生まれてくる建築は、表と裏が単に共存したものではなく裏でも表でもない建築となる。そして、この通りにここにしか生まれない顔を持たせる事を、本設計の主旨とする。

03.Research

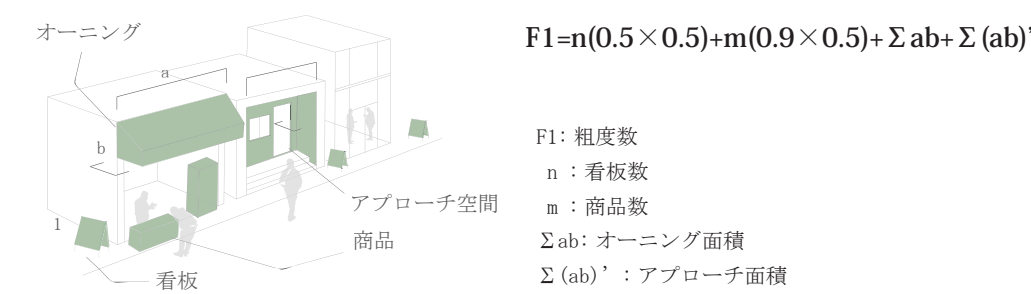


特徴

アメ横周辺の街路空間は老若男女問わず多くの人で賑わっている。今回の調査の目的は、アメ横周辺の商店街エリアにおける表と裏の特徴を見出すことである。そこで今回は、人の滞留がその場所の“表”を表すと考えその要因に焦点をあて街路空間の特徴を導き出す。そしてその滞留する要因として「粗度」、「選択度」、「浸透度」を設定し、その指数をもとに分析を行った。調査対象を、当該敷地の街路とアメ横の主要街路6つとし調査を行った。

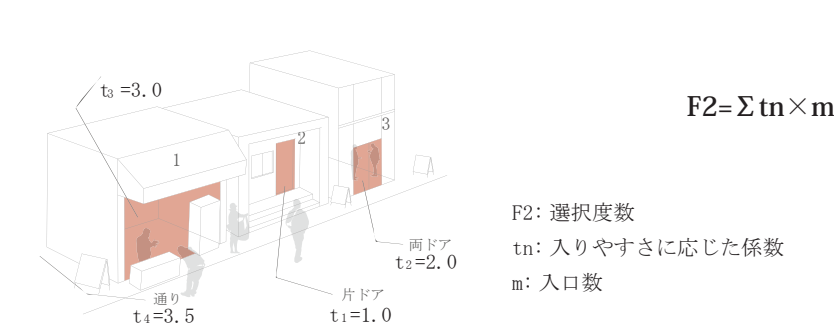
粗度

街路にはみ出した、看板、商品、またオーニングやアプローチ空間により街路に生じる凸凹を面積で表したものを「粗度」とする。この指数は人が街路において滞留する度合いを表す。



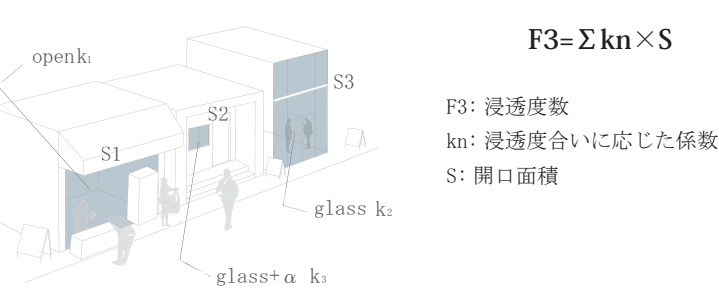
選択度

各街路において、歩行者が入ることのできる入口を対象にし、街路に存在する入口の数を「選択度」とする。この指数は歩行者が建物のなかに入る入りやすさを表した指数である。



浸透度

ガラス、オープンに開いたお店など建物の中を歩行者が感じ取ることのできる街路空間の奥行きを表す指数を開口面積で表したものを「浸透度」とする。

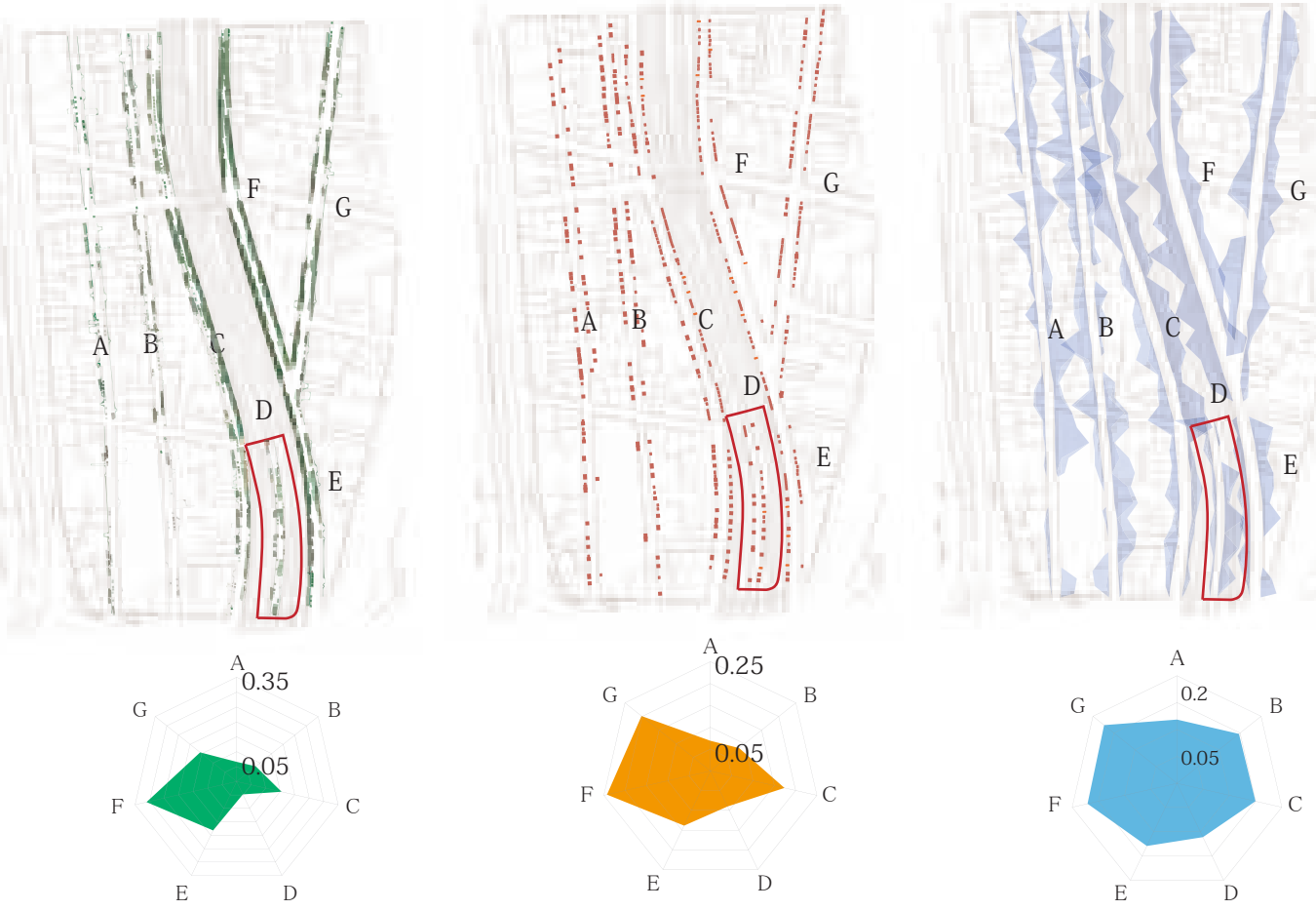


アメ横には次の三タイプに透過の割合が分けられる。右に従い透過率が減少していくことから、同時に浸透度にも影響を与えると考える



分析結果

今回の現地での調査の結果を以下にマッピングした。さらに左に示した数値(要因度数)を使用し、街路ごとにおける各要因度数の密度の比較を行った(円グラフ参照)。結果、粗度や選択度における数値には各街路で数値にばらつきが見られたが、浸透度に関しては各街路でそれほど差が見られなかった。そのことから、各街路には浸透度という“表”としての特徴があると考えられる。



04.Diagram

現状の当該敷地における浸透度分布図



浸透度が生む空間とその機能

本設計では、現在の当該通りがもつ裏側のみに浸透度を考慮した設計を行い、建築の裏が新たな顔を持つことと、それに付随してこの通りが新たな顔を持つことを目指す。また、浸透度が生む空間の具体的な機能としては、裏の要素としての換気ユニット置き場、また新たに生まれる要素としてアメ横に不足する公共の休憩所、テラスをもつ店舗などを設置する。

この部分においては、裏だけでなく表も低い浸透度を示している。これにより、表通りに関わらず、裏通りのような殺伐とした印象を受ける。そこで、表との対比として、裏に高い浸透度を持たせることでアメ横を訪れる人々の滞留の場を設けることを提案する。



浸透度を得た裏側たち。表と裏は浸透度を参考にした協調や対比によって共存する。それは、この通りにしか生まれ得ない顔。



2階の公共通路。浸透度によって生まれた空間はアメ横になかった立体感を生み、不足する公共の休憩の場として存在する。



2階テラス席。浸透度によって生まれた立体感を活かした店舗。ここだけの、アメ横の見方がここにある。